

# 在住外国人日本語学習者に必要な「漢字能力」とは何か 漢字不使用に対する母語話者許容度調査

安藤 淑子

What is “kanji proficiency” required for foreign residents learning Japanese?:  
A study on the tolerance among native speakers about disuse of kanji

ANDO Yoshiko

## Abstract

For foreigners living in Japan, kanji is an essential element in reading and writing of Japanese. However, learning kanji requires much more time and effort than learning kana due to the complex forms, different readings and vast number of characters. Meanwhile, some foreigners who do not have opportunities for systematic Japanese education are living in Japan for prolonged periods without acquiring enough kanji proficiency.

In this study, “reading” and “writing” were analyzed as elements of kanji proficiency. At the same time, the attitudes of native Japanese speakers concerning the disuse of kanji, which affects the “writing” ability not as urgently needed as the “reading ability,” were surveyed. The results revealed that the tolerance among native speakers for writing in kana varied by their impressions of the writer, sense of closeness to writing in kanji and other factors.

キーワード：読む能力 書く能力 漢字の不使用 母語話者許容度

Key words : reading ability, writing ability, disuse of kanji, tolerance among native speakers

## 1. はじめに

外国語学習における包括的かつ一貫性のある基準作りのために考案された「ヨーロッパ共通参照枠」(以下、CEF と略)には、言語活動として「受容的言語活動(reception)」(聞く、読む)、「産出的言語活動(production)」(話す、書く)、「言葉のやりとり(interaction)」、「仲介活動(mediation)」が挙げられている(Council of Europe 2002)。受容的活動と産出的活動は言語活動の基本であり、「言葉のやりとり」の土台となるものである。

体系的な日本語教育を受けていない人々の中には、しばしば「聞く」・「話す」能力と「読む」・「書く」能力<sup>注1)</sup>のバランスが取れていないケース

が見られる。実際、日本に在住する外国人の日本語能力に関する調査においては、音声言語が先行し文字言語能力が低いまま停滞している人々の割合の高さが報告されている<sup>注2)</sup>。

「読む」・「書く」能力を伸長させるためには、文字表記の学習を基礎とした体系的な学習が必要である。同時に、平仮名、片仮名、漢字という三種類の文字を使用する日本語文字表記の特徴が、学習者には目標達成の長い道程を予想させる。

そこで、本稿では、「読む」・「書く」という言語活動に焦点を当て、特に学習が長期に渡る漢字学習を、「読む」(理解)と「書く」(使用)の二つの側面に分けて論じる。その際、日本人が漢字、

山梨県立大学 国際政策学部 国際コミュニケーション学科

Department of International Studies and Communications, Faculty of Global Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

仮名の表記に対してどのような認識を持っているのか、具体例を提示しつつ検討する。

## 2. 文字表記の学習

日本語の文字表記学習は、一般に表音文字である仮名学習から開始される。平仮名、片仮名共に46種の文字といくつかの補助記号、小書き等の書記法を学習することで、日本語の音声の文字化が可能になる。この段階では、学習者は同一の音(音節)に対応する二種類の表記があること、表記の選択にはルールがあることを知る。概ね一文字が一音節に対応する仮名表記は、学習者にとって到達目標が比較的明確であると言える。

一方漢字は、常用漢字1945文字、日本語能力試験1級合格レベル2000文字、新聞雑誌で一般に使用される漢字数では約3000文字(高木2009)が必要であり、さらに一文字に対する音訓の読み、複雑な文字形態の認識と記憶、送り仮名ルールの習得等、仮名の学習に比べて学習内容は圧倒的に多い。一方で、日本語の「正書法」においては、片仮名のように漢字表記選択に関する明確なルールは存在せず、明文化されているのは使用できる漢字の種類(制限)と送り仮名の規則である<sup>注3)</sup>。

漢字表記は、平仮名による「音」に意味の加わった表記であるが、音は平仮名表記と重なっており(振り仮名)、仮名書きの選択も可能である<sup>注4)</sup>。

「書く」ことに関しては上記のようであるが、「読む」ことに関しては、読み手側に選択の余地はない。日本語の表記は一般に「漢字・仮名混じり」であり、初級レベルの学習者にとっても、日本で生活するためには、一定の漢字能力が必須である。漢字知識の欠如は「日本語によって書かれた言葉の世界」からの疎外を意味しており、社会参加の重要なツールを失っているに等しい。

日本語非母語話者(特に非漢字圏出身者)が来日当初直面する問題は、あらゆる「書かれたもの」に存在する漢字の読みである。音声として既知の語彙であっても、漢字表記でそれと理解することには困難がある。表音文字である振り仮名が併記されて、初めて辞書による検索が可能になるのだ

が、こうしてみると、漢字学習においては「読む」ことが優先順位の高い学習課題であると言えることができるだろう。

## 3. 漢字を読む能力

日常生活において「書かれたもの」を理解するためには構成要素である漢字一文字単位の漢字学習ではあまり効率的ではない。

単語の単位で漢字を「読む」ためには、表(表1)のように音声化と意味理解の2つの要素の一方、或いは両方が必要である。

表語(表意)文字である漢字は、実際には日本語母語話者によって音声化を経ないまま、視覚的に理解されることがある。表のB列は、例えば「読み」が難解な人名や地名<sup>注5)</sup>、ドアや機械のボタンに表示された「押」、「出」などの記号化された使用を指している。

(1) 昔なつかしい、昭和レトロの味「甘食」にまつわるエトセトラ。そもそも甘食ってなんて読むの?(YAHOO JAPAN みんなの検定 2008年9月5日)

\*以下すべて下線は筆者

しかし、「読む」(黙読)際に音声化を省略して理解された漢字も、音声化が期待される「読む」(音読)場面では誤読を避けなければならない。「読み方」の知識は通常漢字に関わる教養の一部と考えられている。

(2) 自民党職員は嘆く。「あれで『何だ、漢字も読めないのか』というふうに、麻生さんの首相としての資質を疑問視する雰囲気生まれてしまった」。漢字の誤読を機に首相をからかう風潮が広がり、別の「KY」の冠をつける呼び方も出始める。「解散もやれない」「経済がよくわ

表1 読む能力を構成する要素

	音声化	意味理解
A	-	-
B	-	+
C	+	-
D	+	+

からない」……。 (連載「混沌政局」麻生政権 迷走 (上) 2008年12月5日 読売新聞 電子版)

- (3) 政党の賞味期限が切れるということは、こういうことだろう。人材が「いない」、人材が「集まらない」、人材が「育てられない」。人材に関して、ないないづくしの三ない状態になってしまうのだ。最後の総理大臣・麻生太郎が、あれほどお粗末 (漢字もろくに読めない人間は日本国の総理大臣の資格ゼロ) であるにもかかわらず、その対抗馬が出てこなかったということが自民党の人材払底ぶりをよく示している。(立花隆「緊急寄稿 自民党の「破滅」」週刊文春9月10日号 p40 総選挙特大号)

なお、音声化と意味理解のどちらか一方、或いはその両方が困難な場合、母語話者は漢字に関わる多様な既存知識を活用して「読み」の類推を行なうことができる。この種の類推は、単語を構成する漢字一文字の音や意味によって行われる (文(4))。類推というストラテジーは、記憶の効率的な活用という観点から、一定の漢字知識を有するようになった外国人学習者にとっても有効である<sup>注6)</sup>。

- (4) 生パスタと石窯焼きピッツアの美味しいお店。黒板に「今日のおすすめ」が書いてありました。その魚・肉料理のメニューに「大西海豚のロースのロースト」と。

「大西イルカって イルカのお面かぶって劇団四季やる芸人かね?」「それは大西ライオンだよ」「しかもロースのローストだよ」と盛り上がる私たち。……「だいさいかいぶた」と読むのだそうです。(ほぼ日刊イトイ新聞 「つうじない話」2008-09-13-SAT)

日本語母語話者は、漢字学習の初期には、第一言語習得過程において先行する音声及び表音文字による語彙のストックを漢字に置き換えることができる。一方、日本語非母語話者は、基本的な語彙の学習と文字表記の学習を同時並行で行うため、特に日本語学習の初期においては、漢字の音声化に成功しても該当する語の意味理解とは結びついていない場合がある。

すなわち、基本的な漢字においては、日本語母

語話者は音声化=意味理解 (D列) であるが、日本語学習者においてはC列であるのかD列であるのか、一見して見分けがつかないということである<sup>注7)</sup>。当然のことながら、学習の必要性は「音声化」よりも「意味理解」にあるだろう。

また、「音声化」の特殊なケースであるが、漢字表記の図形としてのまとまりに関する認識が不十分な場合には、「読み」が漢字を形成するパーツに割り振られてしまう場合がある<sup>注8)</sup>。

#### 4. 漢字を書く能力

初級学習者が当初遭遇する困難点は、なによりも漢字の「読み」である。必要性という点から言えば、「読む」ことは「書く」ことよりも優先されるだろう。また、その際学習する必要があるのは、日常読む必要性の高い単語レベルの「意味理解」である。これに対して、「書く」学習には、どのような特徴があるだろうか。

漢字の読み方は当該単語と一対であるが、ある単語の音声に対応する漢字は複数存在することがある (同音異義語)。したがって、漢字を「書く」ためには、まず書かれる単語の意味が前提としてあり、その後には音声に該当する漢字の選択と表記、送り仮名、というように複数の条件を満たしていくことになる。

したがって、単語単位で漢字を「書く」ためには、表(表2)に示すように、文字化と語彙知識の両方が満たされている必要がある。

適切な漢字が思い浮かばない場合、母語話者でもとりあえず表音文字である仮名で書きとめておくことがある。また、母語話者が書けない場合当座に採用する「当て字」は類似した音・形態、及び同音の漢字を代用したものである。ただ、当該単語に関する知識がない場合、「当て字」が偶然

表2 書く能力を構成する要素

	文字化	語彙知識
E	-	-
F	-	+
G	+	-
H	+	+

正解する確率は極めて低くなる(文(5))。要するに、「当て字」のストラテジーによって表中F列からH列への移行は可能であるが、E列からH列への移行はかなり困難である<sup>註9)</sup>。漢字表記は意味と強く連動しており、語彙知識が漢字表記の前提条件である(文(5))。

(5) 「三井さんて、昔は先生をしてだんだってよ。知ってた？」

「どっちだ？ ああ、ここに住んでたおじいさんのほうだな」

「うん。シハン学校だって」

父は新聞の陰から顔を出し、「ほう」と言った。「古い言葉を覚えたな」

誉められるほどのことではない。どういう字をあてるのか、わからないのだ。「市販学校」かなと、漠然と思っではいるのだが。今で言う商業高校だろうか。

『返事はいらぬ』宮部みゆき 新潮文庫  
平成6年 新潮社

すでに第三者によって書かれている漢字を「読む」と異なる点は、書き手が漢字を「書く」ことが任意である点である。漢字が書けなければ、漢字の代わりに仮名表記を選択することも(或いはローマ字表記で間に合わせることも)可能である。但し、前述したように、一般に漢字で書かれることの多い語彙を漢字で書かないことは、漢字が書けない、或いは当該語彙の知識がないとみなされる可能性を含んでいる。

次の(6)、(7)は、「犬」の書いた日記という設定である。仮名の部分の括弧書きは、一般には漢字で書く部分を仮名で書いたため、表記としては有標であることを示している。

(6) 人間のおかあさんが、「ソルベ アルフォンソ マンゴー」というアイスクリームを食べていたの  
で、犬も、おやつを「ようきゅう」しました。

(ほぼ日刊イトイ新聞『ブイヨンの気持ち(未刊)』より 2008年7月13日)

(7) とれないところに行ってしまったボール。犬は、ほんのちょっとだけとろうとはするのですが、深追いはしません。おとうさんが来て、とってくれるのをだまってじっと待つのです。「イ

エヤス型ですね」と言われました。

(ほぼ日刊イトイ新聞『ブイヨンの気持ち(蜜柑<sup>マツ</sup>)』より 2009年6月14日)

文脈からは、犬が単語の意味を知らないで、ただ人間の(大人の)話した「音」を機械的に模倣したことが示唆される。漢字習得における犬の「未熟さ」は、次の文(8)に示されている。

(8) おかえりなさいーい。おとうさん、上海たのしかった？ そうでもないの？ 散歩とか、した？ 人間のおかあさんは風邪をひいたよ。犬は、けっこう元気だったよ。漢字も8個くらい憶えたよ。

(ほぼ日刊イトイ新聞『犬のつく嘘(不詳)』より 2009年1月20日)

漢字は、表音文字である仮名表記で補うことができる。しかし一方で、漢字の不使用は単なる表記選択上の問題ではなく「使用されなかった」という点で有標であり、期待される文字言語知識の欠如を暗に示すことになる<sup>註10)</sup>。「読む」ことほど実質的な問題ではないが、「書く」ことの持つこのような側面について、以下でさらに検証する。

## 5. 漢字「不使用」に関する許容度調査

石黒(前掲)は、一旦すべての語を平仮名に置き換えた文章を、日本語母語話者に漢字かな混じりの文章へ変換させるという調査を行なっている。結果、漢語語彙、地名などの固有名詞は漢字に変換した割合が高く、副詞、接続詞、補助動詞などは仮名表記の選択が多かった。漢字表記への変換率の高い語彙は、母語話者にとって漢字で書かれる方がより自然である、言いかえれば漢字表記に対する親密度が高い語彙であると言えるだろう。

石黒が漢字表記への変換に関する調査を行ったのに対し、本稿では、平仮名で書かれたものに対する日本語母語話者の読み手としての許容度を調査した。許容度調査に関しては、石黒のように文章は使用せず、短文を複数提示した。これは、漢字表記への親密度が使用されるコンテキストとも関連していること、またこれと表裏一体に漢字不使用が許容されるコンテキストとはどのようなものであるかを示すためである。

### 5-1 調査の方法

被調査者はすべて日本語母語話者（大学生 94 名）である。

調査に際しては、すべてひらがなで書かれた短文を 25 種提示した上で、ひらがな表記を許容するかどうかを 6 段階で回答させた。その際、これらの文が誰によって発話されたかは一切考慮に入れる必要がないことに留意させた。また、調査紙の最後に、これらの文を見てどのように感じたか印象を記入させた。

使用した文の文字数は、最長で 20 文字、最短

で 4 文字である（拗音を含む）。なお、ひらがなへの許容度は 1 が最も低く、6 が最も高い。

### 5-2 調査の結果

結果は下図（図 1）の通りであった（グラフ内の数字は回答者数）。

ひらがな文の許容度には、図（図 1）に示すように文によって明らかな差異が見られた。もっとも許容度の高い文は「きょうは、くもりです」の 80 名である（全回答者数における許容度 6 の割合が 85%）。もっとも許容度の低かった文は「か

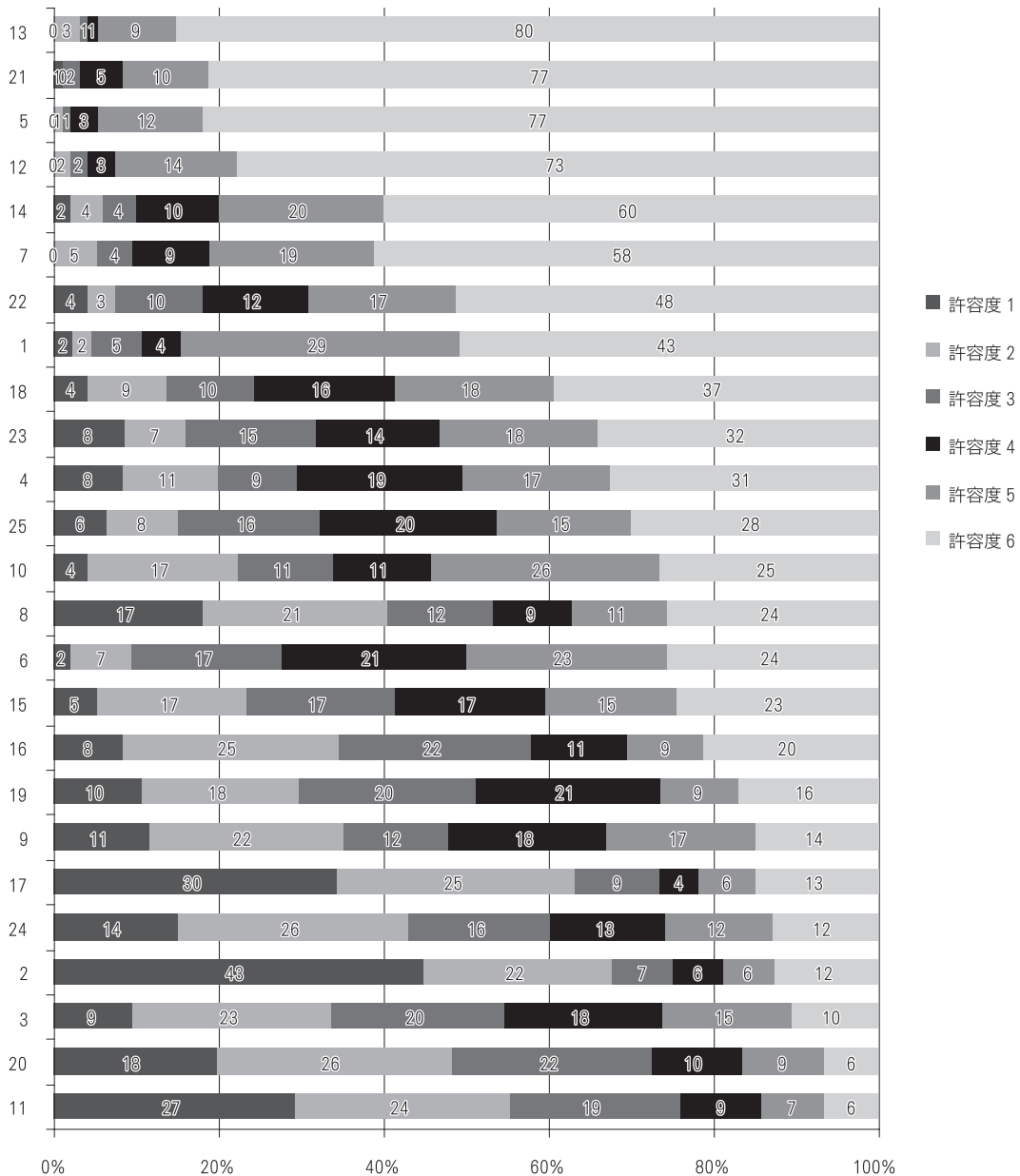


図 1 日本語母語話者に見られた「ひらがな文」の許容度

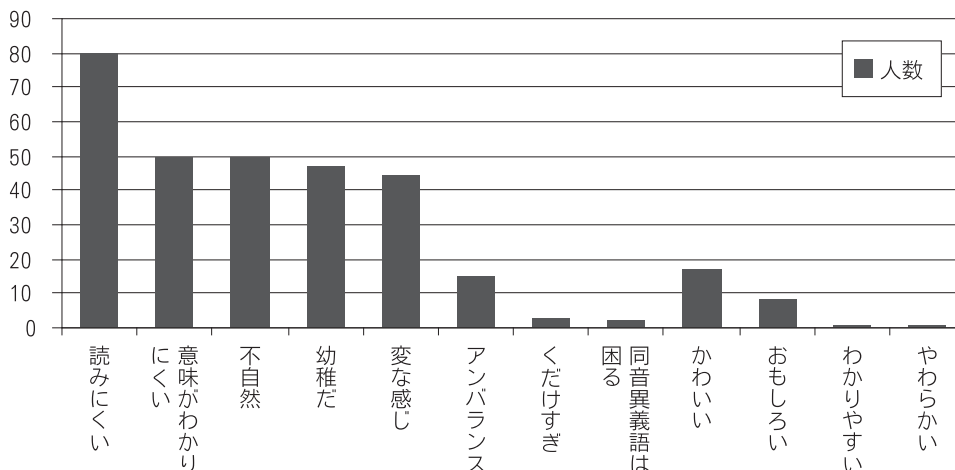


図2 母語話者による「ひらがな文」の印象

かりちょう、こっちへきて」、「あした、かのうですか」の6名（全回答者数における許容度6の割合が6%）である。

なお、ひらがな文に対する印象の調査結果は図のようであった（図2）。「読みにくい」、「意味がわかりにくい」というような、ひらがな表記から生じる実質的な問題を挙げた回答が多かったが、同時に「不自然」「幼稚」「変な」「アンバランス」という心情的な違和感を挙げた回答も多数見られた。

### 5-3 考察

表（表3）に許容度の高い文と許容度の低い文を示す。

許容度に影響した要因を以下の5つに分類した

（括弧内は許容度6の回答者の割合）。

- (1) 文字に対する親近性
  - （文5）うどんが、たべたい。（82%）
  - （文13）きょうは、くもりです。（85%）

文5に対応する文6「ていしょくが、たべたい。」（26%）は許容度が低い。「ていしょく」は漢語語彙であるためだろうが、文13に対応する文1「あしたは、あめです。」（46%）は、漢語語彙ではないため、漢字表記への親密度の差が影響したものと考えられる。

- (2) 文体
  - （文21）これ、みる？（82%）

表3 許容度の高い文と低い文

許容度の高い文	許容度の低い文
許容度5、6の合計が80%を超えた文	許容度1、2の合計が60%を超えた文
きょうは、くもりです。（文13） あしたは、あめです。（文1） うどんが、たべたい。（文5） これ、みる？（文21） おかあさん、こっちへきて。（文12） ぼくは、しょうがくせいです。（文7） ゆみちゃんは、ようちえんへいきます。（文14）	しょうしかによるしゃかいこうぞうのへんか（文2） やまなしけんこうふしまるのうち（文17）
	許容度1、2の合計が50%を超えた文
	かりちょう、こっちへきて。（文11）
	許容度1、2の合計が40%を超えた文
	あした、かのうですか？（文20） こどものかすが、げんしょうする。（文24） わたしは、かいしゃいんです。（文8）

文 21 に対応する文 18 「あした、はなしまししょう。」(26%) 文 19 「あした、おめにかかります。」(17%) は許容度が低く、「改まり」という文体差が影響している。このことから、漢字使用は社会性と密接に関連しており、使用においては社会言語学的な適切さが留意されなければならないことがわかる。

(3) 発話者の幼さ

- (文 7) ぼくは、しょうがくせいです (62%)
- (文 12) おかあさん、こっちへきて (78%)
- (文 14) ゆみこちゃんは、ようちえんへいきます。(64%)

文 7 に対応する文 8 「わたしは、かいしゃいんです。」(26%)、文 12 に対応する文 11 「かかりちょう、こっちへきて。」(6%) のように、同じ構造を持った文であっても発話者が幼いと類推できる場合には許容されている。当然のことながら、「漢字ができない人」が漢字を使用しないことに対する許容度は高くなるが、一方で、漢字を使用しないことに対する印象が母語話者にとって「幼さ(未熟さ)」と結びつきやすい点に注意する必要がある。

(4) 漢語語彙

- (文 2) しょうしかによるしゃかいこうぞうのへんか (13%)
- (文 3) わたしたちは、ようきゅうします。(11%)
- (文 20) あした、かのうですか? (6%)
- (文 23) かくじつです。(34%)
- (文 24) こどものかずが、げんしょうする。(13%)

文 23 に対応する文 22 「それ、たしかですか。」(51%)、文 24 に対応する文 25 「こどものかずが、へっています。」(30%) のように、漢語語彙に対する漢字使用は必須である。一方で、文 23 のように漢語語彙であっても、許容度には幾分差が見られるようである。

(5) 固有名詞など

- (文 17) やまなしけんこうふしまるのうち (14%)
- (文 16) きょう、やまなしけんちょうへきました。(21%)

地名、機関名などは漢字による表示機能が強い語彙群である。人名、住所など識別の必要性の高い表記は漢字使用が必要であると考えられる。

6. まとめと今後の課題

漢字学習においては、「読む」・「書く」という言語活動のそれぞれの側面から学習内容を検討する必要があるだろう。

「読む」に関しては、音声化よりも意味理解の側面が重要である。特に、日本に在住する人々にとって、日常身近な漢字の読みは必須課題である。

「書く」に関しては、文字化と意味理解の双方が重要である。同時に、書く必要性のより高い漢字を優先的に学習しなければならない。書く必要性の高い漢字とは、漢字で書かれることを母語話者より期待される確率の高い漢字であり、母語話者にとって漢字表記への親密度の高い漢字である。

従来の漢字学習は、「読む」・「書く」練習が一体化している場合が多く、読めることと書けることの必要性の差異はあまり考慮されてこなかった。したがって、読む必要のある漢字と、書く必要のある漢字との語彙差に関する配慮もなされていない。この点に関しては、母語話者の漢字学習とは異り、学習者の実用に即した発想の転換が必要だろう。

漢字学習は長期に渡り、また学習者にとって到達目標が見えにくいという難点があるが、一方で、日本で生活するためには避けることのできない学習課題でもある。今後、日本の文字言語社会へ多くの人々が参加するにあたって、日常生活における不利益を解消するためには、漢字学習をより効率的で、かつ学習者のニーズに適合したものへ変換していく必要がある。

これまでの漢字表記に関する教授方法は、体系的・長期的な学習計画に乗らない多くの人々を漢字から遠ざけ、同時に、日本の文字言語社会から遠ざけてきた可能性がある。漢字という日本語の特殊性と、日本に滞在する外国人の増加という状況を併せ考えるとき、漢字学習指導のための新たな調査・研究が、緊急の課題である。

【注】

- 1) CEF では、言語能力の最も低いレベル A1 の「読む」「書く」能力を次のように示している（表は CEF を元に筆者が再構成した）。
- 2) 国立国語研究所（2009）の調査によると、読み書きが全くできないか或いは平仮名カタカナのみと答えた割合が約 25%であった。甲府市（2009）の調査においても、「読む」25%、「書く」30%の割合で平仮名・カタカナレベルに留まっていることが報告されている。漢字習得が十分ではない人々は、日本語学習の機会が十分得られていない長期滞在者の中にも同程度存在している。
- 3) 一般的な日本語表記の目安になっているのは、「常用漢字表」（昭和 56 年内閣告示第 1 号）、「常用漢字表付表」、「表外漢字字体表」（平成 12 年）「送り仮名の付け方」（昭和 48 年内閣告示第 2 号）である。
- 4) 石黒（2004）によれば、漢字表記の選択には次のような一般的な「ルール」が存在する。
  - ① 漢字にできるものはすべて漢字で書く
  - ② 和語はひらがなで、漢語は漢字で書く
  - ③ 実質語は漢字で、機能語はひらがなで書く
 ②と③は慣用や常用漢字表を加味して書き分けられている。
- 5) 昔からある地名の「音」に漢字をあてはめた場合、あてはめられた漢字のみで原音を類推することが困難な場合がある。山梨県にある「シビレ湖」という湖は「四尾連湖」と書くが、過去には別の漢字があてられていたそうである。

表1 CEFにおける「読む」ことに関連する能力 〈A1 レベル〉

包括的な読解	非常に簡単なテキストを、身近な名前、単語や基本的な表現を一つずつ取り上げて、必要であれば読み直しながら、一文一節ずつ理解することができる。
通信文を読むこと	葉書の短い簡単なメッセージは理解することができる。
世情を把握するために読むこと	日常のよくある状況下で、簡単な掲示の中から身近な名前や語、基本的な表現がわかる
情報や議論を読むこと	簡単な情報の内容や、簡潔な描写の概要を把握することができる。特に視覚的な補助があれば、さらに容易に概要の把握ができる。
説明書を読むこと	短い、簡潔に書かれた方向指示を理解できる。

表2 CEFにおける「書く」ことに関連する能力 〈A1 レベル〉

総合的な書く活動	簡単な表現や文を単独に書くことができる。
創作	自分自身や想像上の人々について、どこに住んでいるか、何をする人なのかについて、簡単な句や文を書くことができる。
一般的な書かれた言葉でのやりとり*	個人的な細かい情報の要求を書いたり、文書で伝えたりすることができる。
通信*	短い簡単な葉書を書くことができる。
記録、メッセージ、書式*	ホテルの予約用紙などに、数、日付、自分の名前、国籍、住所、年、生年月日、入国日などを書くことができる。

表3 CEFにおける正書法の把握

正書法の把握**	例えば、簡単な記号や指示、日常的な物の名前、店の名前や普段使う定型表現など、馴染みのある単語や短い言い回しを書き写すことができる。 当人の住所、国籍やその他の個人的な情報を正確に書くことができる。
----------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------



- 6) ここでは論じていないが、漢字の蓄積が少ない日本語学習者には、この種の類推は困難であるが、漢字の形態(形声文字)や造語に用いられる漢字(接辞)の記憶など、別のストラテジーの獲得によって音や意味を効率的に類推することが可能である。
- 7) ある外国人の小学生は、漢字練習帳に読み方をほぼ正しく書いていたが、それぞれの単語の意味を尋ねるとほとんどがわからないと言った。彼にとって漢字の練習とは、漢字(図形)をひらがな(音声)に転換する作業(或いはその逆)でしかなく、しかも、それを完璧にやってのけていたのである。
- 8) これは、日本人の例であるが、小学校入学前の男の子は、自分の名前を正しく漢字で「秋山」と書いた後、「秋」の左半分の「禾」の部分指して「あ」、右半分の「火」の部分指して「き」と読んだ。
- 9) これは筆者自身の経験である。ラジオで聞いた「ひしょうたい」という耳慣れない語に対して、それが某国より発射された空飛ぶ物体を指すとわかった時点で、初めて「飛翔体」という漢字を当てることができた。このことは、視覚的な意味への依存度の高い漢語語彙は、音声だけで提示された場合、意味理解とそれに連動した文字化において文脈依存度が極めて高くなることを示している。
- 10) 小学校1学年から6学年における学習配当漢字は計1006文字である。

#### 【参考文献】

- (1) 石黒圭(2004)『よくわかる文章表現の技術I』明治書院
- (2) 国語研究会監修(2001)『現行の国語表記の基準』(第六次改訂)ぎょうせい
- (3) 国立国語研究所(2009)「『生活のための日本語:全国調査』結果報告〈速報版〉」国立国語研究所
- (4) 高木裕子(2009)『日本語教師トレーニングマニュアル 6 日本語の文字・表記入門 解説と演習』(第8刷)バベルプレス
- (5) 山梨県立大学多文化共生研究会(2009)『甲府市外国人住民実態調査報告書』山梨県立大学
- (6) Council of Europe(2002) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*, 3rd printing, Cambridge University Press. 『外国語教育Ⅱ-外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠-』(2004) 訳・編吉島茂ほか、朝日出版社

#### 【引用文献】

- (1) ほぼ日刊イトイ新聞 <http://www.1101.com/home.html>

- (2) 『週刊文春』(文芸春秋社)
- (3) 『返事はいらぬ』宮部みゆき、新潮文庫(新潮社)
- (4) Yahoo JAPAN みんなの検定 <http://minna.cert.yahoo.co.jp>

#### 【資料】

##### 調査文一覧

1. あしたは、あめです。
2. しょうしかによるしゃかいこうぞうのへんか
3. わたしたちは、ようきゅうします。
4. あいすくりーむが、たべたい。
5. うどんが、たべたい。
6. ていしょくが、たべたい。
7. ぼくは、しょうがくせいです。
8. わたしは、かいしゃいんです。
9. これは、たなかふみあきさんです。
10. これは、さかいゆみこちゃんです。
11. かかりちょう、こっちへきて。
12. おかあさん、こっちへきて。
13. きょうは、くもりです。
14. ゆみこちゃんは、ようちえんへいきます。
15. あした、でばーとへいきます。
16. きょう、やまなしけんちょうへいきました。
17. やまなしけんこうふしまるのうち
18. あした、はなしまししょう。
19. あした、おめにかかります。
20. あした、かのうですか。
21. これ、みる?
22. それ、たしかですか。
23. かくじつです。
24. こどものかずが、げんしょうする。
25. こどものかずが、へっています。